

## 中学硬式野球における投手の投球制限に関するガイドライン制定までの経緯

日本中学硬式野球協議会（後勝会長）は、投手の投球制限に関する統一ガイドライン（別添参照）を制定した。2015年からの一斉適用を申し合せている。ここに至るまでの経緯は以下のとおりである。

まず、「子供たちを投球障害から守る」ことは全ての団体の関係者にとっての共通の思いであることを前置きする。各団体とも、著名なスポーツドクターをはじめ各方面の識者を交えて、投球障害のメカニズムや医科学的な知識を共に学ぶことにより、現場の指導者に警鐘を鳴らし、また、リーグによって多少の相違はあるが、1日における投球回数を制限するなどの諸策を講じてきた。

しかしながら、実際、子どもたちに野球の手解きや鍛錬をすること、そして、試合に出場させることなどは、現場の指導者の範疇であり、権限でもある。特に、試合経験を積ませることは、技術向上のためには不可欠な機会であり、また、選手自身も試合に出ることを強く望んでいる。目標としてモチベーションの向上にもつながる重要な鍛錬の場の一つであることは言うまでもない。

従って、各リーグの運営側が、現場の指導の中に立ち入って直接指導者に投球過多（投げすぎ）を指導するには限界があり、結果として、「子供たちを投球障害から守る」ことは、指導者自身の見識と指導方針に委ねる部分が大きくなっている。

一方で、アマチュア野球で大会を運営していく上では、各地区予選から全国大会に至るまで、トーナメント方式により定められた期間内に試合が行われるため、運営側には、ダブルヘッダーや2連戦、3連戦、4連戦まで組まざるを得ない事情が存在する。つまり、勝ち進むほど連戦が続く。多くの場合、運営側と各チーム（指導者）側との相互理解と協力によりトーナメント大会の運営は成り立っている。

こんな事情の中で価値観の高い大会ほどチーム全体が勝つことに執着する傾向があり、多くの指導者が投球障害に繋がる投球過多の状態にある投手を登板させた経験を持っている。そこで、どのようにして「子どもたちを投球障害から守る」のか、各リーグ運営側の方々とともに、真剣に取り組んだ結果が今回制定した統一ガイドラインである。

複数投手の育成も単なる呼びかけでは十分とは言えない。特に成長期の子どもたちが参加し、連戦が伴うトーナメント大会を運営していく以上、投手が登板過多になるかどうかの判断は、指導者側だけに一方的に委ねるのではなく、一定の判断基準をルールの中に示すことが、運営側の重要な役割であることを各リーグ関係者に強く認識していただいたことが成果である。

本ガイドライン制作にあたっては、1994年に始まったジャイアンツ杯野球大会（現：日本

中学野球選手権大会)の中で取り入れきた規程をベースに、日本臨床スポーツ外科学会からの答申も参考に、最終形になった。

野球を愛する子供たちの未来を守るための一助になることを祈念する。

日本中学硬式野球協議会